

「伊賀・信楽焼系陶器」と呼ばれる陶器について

前 川 浩 一

はじめに

今回、「堀新遺跡」と名付けた遺跡の発掘調査では、所謂「伊賀・信楽焼系陶器」又は「京焼風陶器」と呼ばれる陶器が多量に出土した。さらに、これら陶器の焼成に使用したとみられる匣鉢、輪トチン、タナ板等窯道具類、窯壁、素焼陶器が多量に出土し、窯跡等を検出できなかったものの、調査地周辺に窯跡の存在を考えるための重要な調査となった。

これらはカク乱状を呈する砂層中から出土し、肥前系磁器、瀬戸・美濃陶器など各地の陶磁器も共に多量に出土した。また、隣接する堀新墓地にかかわるとみられる人骨、蔵骨器も出土し、これらの陶器やその砂層の時期決定には問題がある。

今回出土した陶器は、従前に窯跡と推定されている地点の表面採集資料を「音羽焼」として、資料報告されているものと同一のものである。

その地点は、現在、周知の遺跡である津田遺跡に含まれており、今回の調査地西側を流れる北境川上流250mに位置している。したがって、「音羽焼」とされるものとのつながりは直接的ではないが、器種、胎土、釉調を比べると同一のものと云える。

小稿では、貝塚市内における発掘調査等によって出土したこれら陶器について紹介し、これらのもつ問題点を整理し、今後の調査研究の一助としたい。

なお、事実報告以外のこれら陶器の年代等については、平成5年11月20日に開催された「貝塚・音羽焼の諸問題」という研究会の資料集、発表者、参加者各位の発言等にもとづいた。

出土状況

市内各地の現地表面、特に農地には、これら陶器がコンスタントに散布している。発掘調査によっても出土するものの、大部分は耕作土、カク乱内等から出土するものであり、遺構内から出土するものは少数である。また、細片となっているものがほとんどであるため、調査によって得られたものからは、器形等を明らかにすることができないものも多い。

以下、発掘調査によって出土したもの、表面採集によって良好な資料が得られたものに

ついて、その概要を示す。

1、加治・神前・畠中遺跡

平成2年度、貝塚市役所浄化槽設置に伴う発掘調査によって検出した溝SD-1の護岸石組の裏込め層内より、これら陶器が出土した。

行平、行平蓋、土瓶底部、碗、灯明台が出土した。これらの胎土は灰白色を呈し、砂粒を含まない精良なものである。釉は灰オリーブ色を呈し、薄くかかる。

溝自体は現代まで使用されていたようだが、石組等からは江戸時代頃のものしか出土せず、溝が構築されたのは江戸時代と考えられる。

2、加治・神前・畠中遺跡

平成3年度、貝塚市民文化会館建設に伴う発掘調査によって検出した溝SD-13から、これら陶器が出土した。

片口、灯さんが出土した。胎土は灰白色を呈し、砂粒を含まない精良なものである。釉は灰オリーブ色を呈するが、灯さんは火を受けて白色化している。

染付等が共に出土し、18世紀後半から19世紀頃の時期が考えられる。

3、沢共同墓地遺跡（図1）

本例は発掘調査によって出土したものではなく、墓地地表面にて採集したものである。したがって、時期について言及することはできない。蔵骨器として使用されていたものと推定できる。

土瓶蓋（1、2）、土瓶（3）、行平（4、5）、片口（6）、鉢底部（7）、土瓶底部（8）、小型壺（9）、花生（10）がある。

1は胎土が灰黄色を呈し、白色の釉がかかる。4は暗黄褐色を呈し、暗褐色の釉が外面にかかる。9は胎土が黄灰色を呈し、暗オリーブ色の釉がかかる。それ以外は胎土が灰白色を呈し、灰オリーブ色の釉がかかる。

4、橋本遺跡（図2）

本例も発掘調査によって出土したものではなく、府道設置による墓地移転時に出土したものである。蔵骨器として使用されていたものと推定できる。

土瓶蓋（11）、土瓶（12、13）、行平蓋（14、15）、壺（16）、鉢（17）が出土した。

14を除き、胎土は灰白色を呈し、灰オリーブ色の釉が薄くかかる。14は胎土が明黄褐色を呈し、他のものに比べるとやや粗く、外面に暗褐色の釉を帯状にかける。

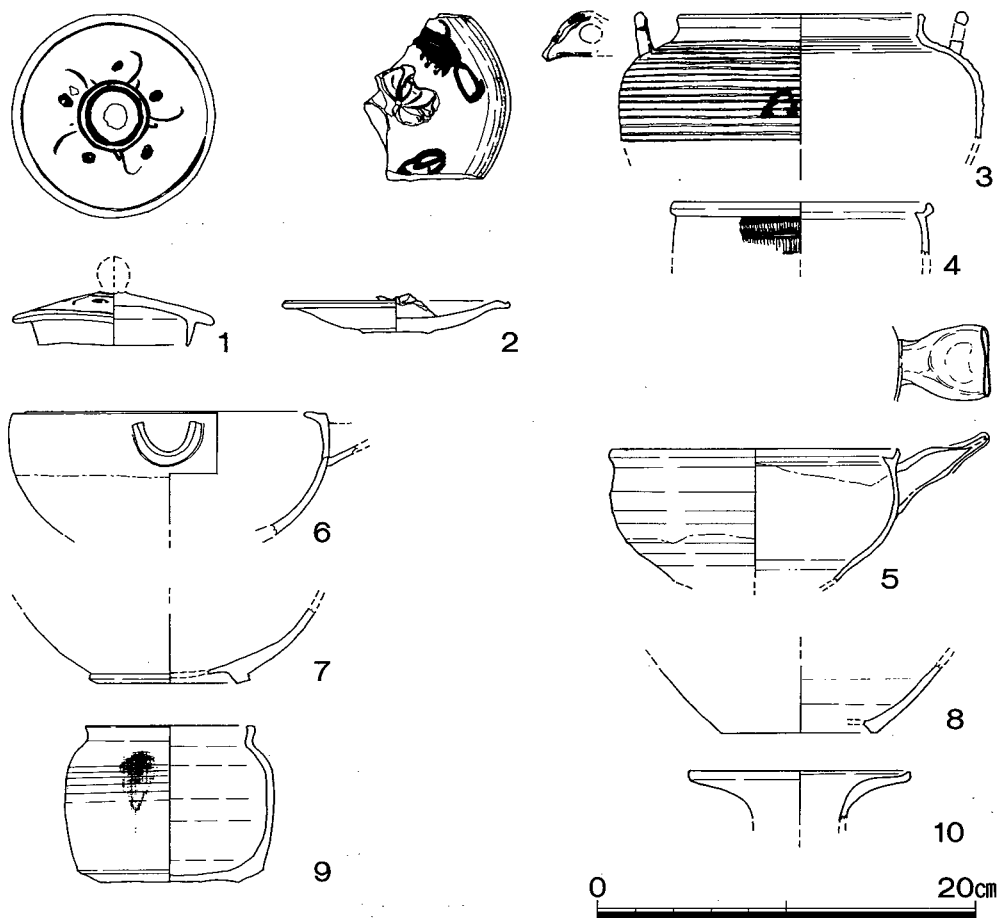


図1 沢共同墓地遺跡出土陶器

5、貝塚寺内町遺跡

昭和59年度に実施した願泉寺境内における発掘調査によって、これら陶器が出土した。

行平、行平蓋、土瓶、土瓶蓋、山水土瓶、鉢、小皿が出土した。

ほとんどのものは胎土が灰白色を呈し、灰オリーブ色の釉がかかる。行平は胎土が灰白色を呈し、内面に灰オリーブ色の釉をかけ、外面は暗褐色の釉をかけた後、トビガンナを施す。これらは貝塚産のものと考えられる。

他に、土瓶蓋に暗赤褐色の釉をかけるもの、明灰褐色の胎土に浅黄色の釉をかけるもの、などが存在し、これらは他地域産のものと考えられる。

また、胎土が灰白色を呈し、淡黄色の釉がかかり、底部に「貝塚」の刻印を有するもの(18)、18と同胎土同釉で「錦光山」の刻印を有するもの(19)が存在する。(図2)

「貝塚」銘については、出土例が他になく、文献等からも見いだせない。

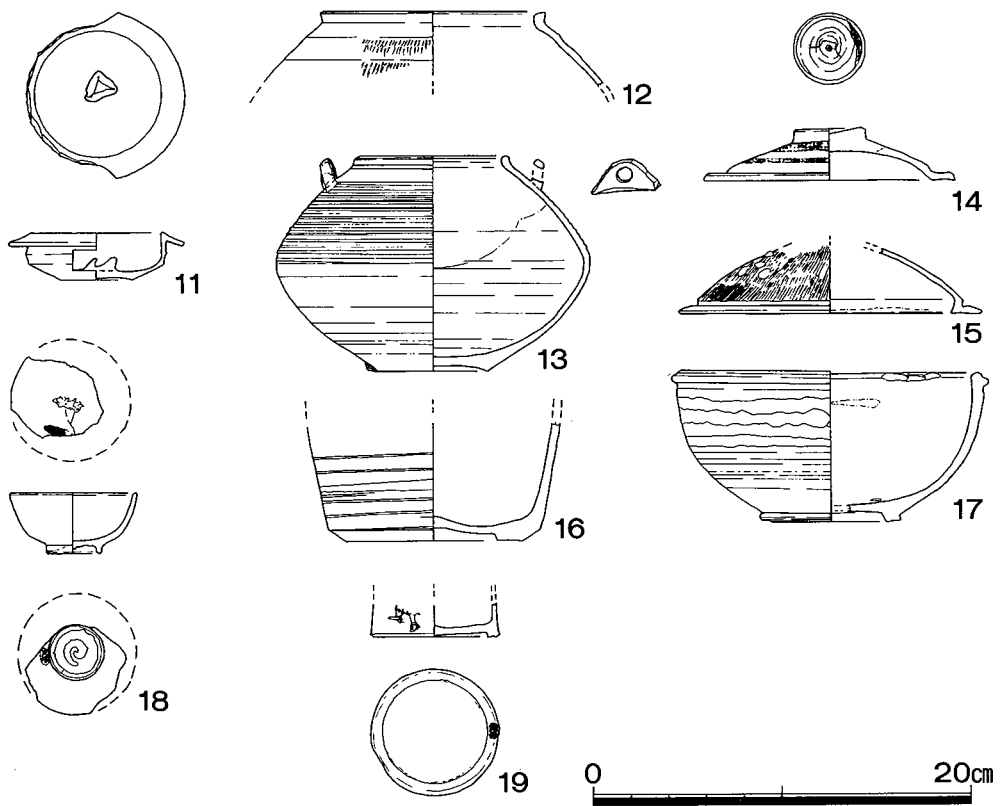


図2 橋本墓地、貝塚寺内町遺跡出土陶器

「錦光山」銘については、京都、粟田焼窯元鍵屋の山号とみられ、京都産であることが考えられる。しかし、「貝塚」銘と同胎土、同釉であることに問題がある。

6、貝塚寺内町遺跡

平成5年度に実施した個人住宅建替工事に伴う発掘調査によって、これら陶器が出土した。

遺構に伴うものではなく、現代以前の人工盛土内からの出土である。少量、染付等が出土したものの、大部分はこれらの陶器や匣鉢等である。

陶器では、土瓶、土瓶蓋、行平、行平蓋、片口、鉢、小鉢、土鍋、碗、灯さん、灯明台、茶入蓋が出土した。窯道具では、タナ板、輪トチン、ピン、匣鉢、丸に幸の字の刻印がある匣鉢が出土した。

陶器は胎土が灰白色を呈し、灰オリーブ色の釉がかかる。タナ板、匣鉢は、信楽焼様を呈し、表面は淡褐色であり、灰白色、淡緑色等の釉がかかる。

丸に幸の字の刻印は、堀新遺跡のものと同一である。

市内出土陶器の問題点

まず第一に、時期の問題がある。

先にみたもので、時期について考えることができるものは、加治・神前・畠中遺跡 2 例だけである。

しかし、供伴遺物の時期は時代幅を持ち、時期を細かく確定することは難しい。他の例では、表面採集、盛土内出土であり、時期について云々することはできない。

市外の他の調査例では、18世紀後半以降にこれら陶器が出現し、その後量が増加し、19世紀まで続くと言われており、一応これらには矛盾しない。

市内においてかなりの量が出土するものの、出現、盛行時期が明確にできていない。

第2に、生産地の問題である。

先にみたとおり、貝塚市内には窯道具等と共にこれら陶器が出土する地点が3ヶ所存在する。

堀新遺跡と「音羽焼」として紹介されている津田遺跡の例は、その内容から同一のものと考えることができる。しかし、6、貝塚寺内町遺跡の例については、胎土、釉調、窯道具については一致するものの、器種がやや異なっており、同一のものとは現時点では断言できない。

また、貝塚寺内町遺跡のこの出土地は、願泉寺御庭焼の陶器所というものが存在したとの伝承があり、それぞれの伝承が事実ならば、「音羽焼」と「願泉寺御庭焼」がほぼ同一のものになってしまう。

現状では窯跡など生産地を明らかにする資料は得られていない。伝承が先行しており、逆にこれら陶器を複雑にしている。

生産地を明確にし、その内容を明らかにする必要がある。

第3に、流通の問題がある。

生産地は確定していないものの、市内において、これら陶器が生産されていたことはほぼ確実であり、市内及び周辺には流通していたようである。

しかし、願泉寺境内における調査では、他地域で生産されたものが入っている可能性が高く、それぞれがどのような流通をしていたのか明確にする必要がある。

第4に、名称の問題がある。

「音羽焼」という名称については、確実な文献が存在せず、伝承地から窯道具、陶器が発見されることをもって「音羽焼」とされている。また、伝承では17世紀前半頃窯業が開

始されたとしているが、調査等ではその時期の遺物は発見できない。

したがって、堀新遺跡、津田遺跡から出土するこれら陶器を「音羽焼」とすることには問題がある。

これら陶器の問題点

第1には、先に述べたことと同様に、生産地と流通の問題がある。

泉南地域をみただけでも、貝塚市内には3ヶ所の窯跡にかかわると思われる地点が存在し、泉南郡岬町では「深日焼」というものが存在する。それぞれの流通、製品の分布を明らかにしたわけではないが、ほぼ生産地近郊にて流通、使用されているようである。

しかし、先に見たように、貝塚市内において、量は少ないものの、市内産以外のものも流通していたようであり、完全に近郊産のものだけで需要を賄っていたとはできないようである。

だが、江戸や京都などに貝塚市内産のものが流通しておらず、多少の流通の交わりがあるものの、生産地のほぼ近郊にて流通しているものと思われる。

第2には、「伊賀・信楽焼系陶器」などの名称の問題である。

現時点では、類似した形態の陶器が各地で生産されるようになった系譜が明らかでなく、特定の窯業名称を使用することは、あたかもそれが源とする感覚を与えてしまう。

したがって、系譜や生産地が明らかになるまでは、陶器としておけば良いのではないか。

第3は、これら陶器が各地で生産され、大流行するのはなぜかということである。

18世紀後半になって、これら陶器が出現することはほぼ確実と思われるが、なぜ、このような形態の陶器のニーズが生まれたのかは、触れられることは少なく、漠然と食生活の変化が影響しているものと考えられてきた。

森村健一氏は、移動式のカマドが普及し、それに使用するために、行平、土鍋等が普及したとしている。

江戸時代の絵図等を見ると、カマドは移動式のものを使用しているもの、それにかけるナベ、カマは鉄製のものを使用しているものがほとんどであり、調理の部分では変化はみられない。

では、これら陶器が出現する18世紀後半は、何か変化があったのか。

渡部実氏によると、18世紀中頃に田楽などを売る店が出現し、18世紀末には居酒屋などが繁昌するとしている。

これら外食産業において、たとえば柳川鍋などを一人用として出すためにこれらのニーズが生まれ、外食産業が繁昌することにより、一般家庭にまで普及したと考えられるのではないだろうか。

おわりに

結果的に問題点のみを羅列しただけに留まった。

貝塚市内に限っても、今回のこれら陶器の大量出土から得られた成果は、これら陶器の器形が明らかになったことのみであり、生産地や時期などの問題点が多く残った。

市域の調査では近世の遺構等を調査することが少ないが、近年の貝塚寺内町遺跡の調査では、近世後半から近代にかけての調査例が増加しており、今後、生産地と消費地両面からのアプローチが期待できる。

〔参考文献〕

乾 哲也「貝塚音羽焼灰原採集の陶磁器」 摂河泉会報第10号 平成2年

南川孝司、渋谷高秀、森村健一 「貝塚市の音羽焼窯の表面採集遺物」『関西近世考古学研究Ⅰ』関西近世考古学研究会 平成3年

森村健一編『貝塚・音羽焼の諸問題』近世文化研究会他 平成5年

貝塚市教育委員会『加治神前畠中遺跡発掘調査概要』貝塚市埋蔵文化財調査報告第21集
平成3年

貝塚市教育委員会『加治神前畠中遺跡発掘調査概要－仮称市民文化会館の調査－』貝塚市埋蔵文化財調査報告第26集 平成5年

貝塚市教育委員会『貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅶ』貝塚市埋蔵文化財調査報告第9集
昭和60年

貝塚市教育委員会『貝塚市遺跡群発掘調査概要16』貝塚市埋蔵文化財調査報告第32集
平成6年

NHKデータ情報部編『ヴィジュアル百科 江戸事情 第1巻 生活編』雄山閣出版
平成3年

渡部 実『日本食生活史』吉川弘文館 昭和39年